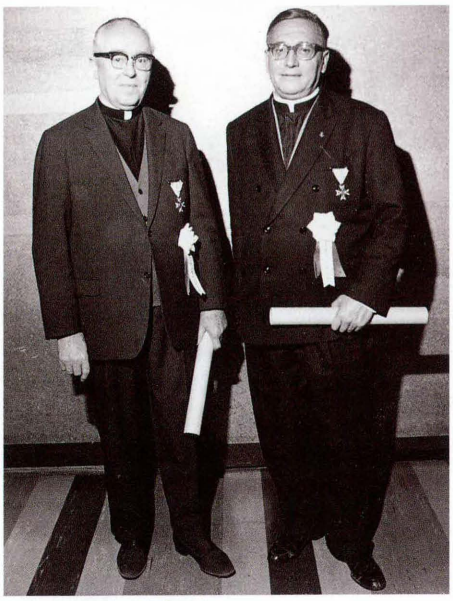
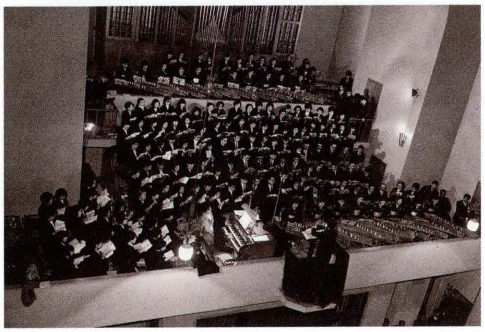
1969
［昭和44年］


■ゴーセンス学長受勲記念

2月11日　**ゴーセンス学長、勲四等瑞宝章受勲。**
2月15日　スピリチュアルコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　グレゴリオ聖歌他
3月10日　太田司朗教授最終講義。「世阿弥の芸術観とその教育法」。
3月24日　演奏旅行。（松江）
3月25日　エリザベト音楽大学管弦楽団演奏会。（広島市公会堂）
　　メンデルスゾーン：交響曲《イタリア》他
4月19日　新校舎（現3号館）落成。
6月　6日　ジョイントリサイタル。（広島市青少年センター）
　　井上二葉、後藤玲子、東学
7月20日　アポロ11号月面着陸、初めて人類月へ。
11月4～8日　第22回定期演奏会及び演奏旅行。（松山、広島、防府、柳井）
　　ハイドン：ミサ曲第9番　他
12月20日　クリスマスコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　サン＝サーンス：《クリスマス・オラトリオ》他
　　指揮：水嶋良雄


■《ミサ・ペンタトニカ》

昭和44年頃を振り返って　16期　森田　利美

1969年（昭和44）は、16期生にとっては大学生活最後の年。この年のことについての原稿依頼をいただいた。自分達が卒業したのはつい昨日のように思っていたが、よく考えてみると、何と今から約30年も前のことであり、いざとなるとなかなか思い出せないものである。これは困ったなと思いながらも、どんなことがあったのかといろいろ思いを巡らしてみた。

我が16期生は、入学当初は確か90余人の学生であったように思うが、そのうち20人を男性が占めていたことは、まずもって特筆すべきであろう。

とりわけ、初代学長ゴーセンス師が、16期生を迎えたことにより男子学生が急増した（4学年合わせて30余人となり、約1割を占めることとなった）ことを、何かにつけて大変喜んでおられたことがとても強く印象に残っている。全国から集まった20人の男性諸君は各科に数人ずつ分散していたと思うが、実に個性豊かな勇者たちであり、大変ユニークな学年であったように思っている。

一人一人のことを逐一述べることは差し控えて、学年全体としての様子をかいま見ると例えば、西条（現在の東広島市）の教養部での体育の授業では、男性だけでソフトボールの試合を楽しむに余りある人数であり、男性パワーを溢れさせていたのである。

こうした雰囲気は、当時の大学の中庭において実施されていた男子学生と先生方とによる「ソフトボールの球飛ばし競争？」［中庭東側から入って、講堂（現セシリアホール）の窓ガラスを割る］にも象徴されており、先生方の方も学生に負けじと意欲を燃やしてボールに向かっておられた姿を懐かしく思い出している。

窓ガラスを割ることは決して褒められることではないが、こうした男子学生と先生方との和気あいあいとした中にも熱気に満ちた様子に、ゴーセンス学長は目を細めておられたに違いない。

また、夏休みに実施した修学旅行は、添乗員なしで夜行列車を使い、真夜中に帰省先から途中下車をする友を迎えながら、一週間の信州の旅を楽しんだりもしたものである。

さて、肝心な音楽的な面での記憶がなかなか蘇ってこないのが実に不思議に思えるのである。ただ男性が増えたことにより、音楽的な厚みが増しより一層深みの増した混声合唱が経験できるようになったことは確かだと思っているし、そのことがこれから後のエリザベトにとって大きくプラスに働いていったに違いないと自負しているのは私だけであろうか。

創立50周年を迎えた我が「エリザベト音楽大学」が、中国地方を否日本を代表する音楽大学として、今後益々発展することを願って拙い筆を置くことにする。

1970
［昭和45年］

2月14日　スピリチュアルコンサート。（世界平和記念聖堂）
3月14～9月13日　日本万国博覧会。
4月 1日　ゴーセンス学長退任。第2代学長にホセ・テホン教授就任。
4月16日　ベルギー国アルベール殿下本学訪問。
5月20日　学生会発足。従来の学友会は解消。
5月23～24日　演奏旅行。「天草キリスト教伝来 400年祭」。
5月30日　エリザベト音楽大学後援会発足。従来の父兄会を再編。
7月14日　日本を「ニッポン」と発音することを政府が表明。
9月4～6日　万国博覧会記念
　4日　ベルギーオルガン曲演奏会。
　（万国博キリスト教会館）
　5日　東洋宗教音楽会議。
　－新しいカトリック典礼への東洋音楽への適合－
　（万国博ベルギー館）
　5日　ジョイントリサイタル。（京都府立文化芸術会館）
　6日　東洋宗教音楽会議。
　－新しいカトリック典礼への和楽器の適合－
　（京都市洛星高校）
10月 9日　エリザベトコンサート。（広島市青少年センター）
　－ピアノ－
10月23～11月3日　第1回エリザベト音楽大学「大学祭」。
　テーマは「飛翔」。
11月9～11日　**第23回定期演奏会及び演奏旅行**。
　（広島、大牟田、下関）
　ベートーヴェン：ミサ曲ハ長調　他
12月21日　クリスマスコンサート。
　オネゲル：《クリスマス・カンタータ》他
12月21日～24日　冬期受験講習会始まる。

■最後の制服姿

■歓迎運動会

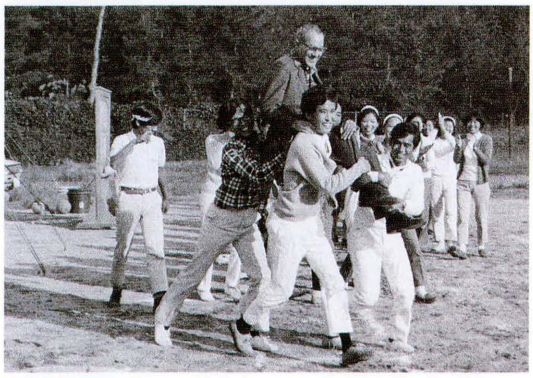
■第23回定期演奏会

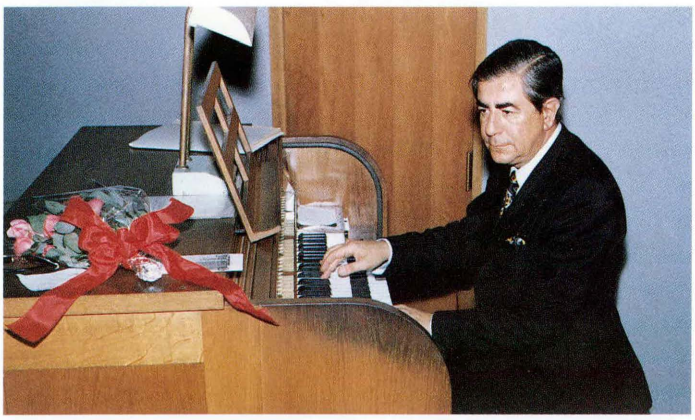
「大変革」がやってきた　17期　渡辺　由紀

私共17期生は大学生活の前半を創立者であられるゴーセンス学長、後半をテホン学長、加えてその前半は厳格なる制服、後半は自由な私服という激動!の時代を過ごした。制服の黒スーツには凛とした気品のようなものが感じられる上、朝何を着るべきか迷わずに済むところが気に入っていたが、服装における自由表現を求めた学生達の声が大学側に届いたのか「大変革」となった。当時は驚異的にミニスカートが流行っており、皇室の妃殿下や総理夫人までが膝上丈を競うかに見えた。私服着用の初日、厳格の蛹から一気に羽化した学生がシースルーなるものまで着ていたらしく、緊張感に満ちた授業で学生に信望の厚い井上一清先生をして「目のやり場に困った」と言わしめたとか。この写真は「大変革」の直前、冬用のコートまでが紺色で統一されていた頃、隣の教会のベンチに小鳥のように仲良く並んで何をさえずっていたのやら…。

1971
［昭和46年］

■アルペ神父来校


■体育祭


■ピエール・コシュロー

1月28日　エリザベトコンサート。（広島市公会堂）
　　－ピアノリサイタル－
2月13日　スピリチュアルコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　シュレーダー：《聖母マリアのためのアンティフォナ》
4月11日　**イエズス会総会長ペトロ・アルペ神父来校。**
4月29～5月3日　第2回大学祭。テーマは「調和」。
5月16日　エリザベトコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　ガルシア・リョヴェラス、オルガンリサイタル。
10月24日　エリザベトコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　ピエール・コシュロー、オルガンリサイタル。
11月5～6日・8日　第24回定期演奏会及び演奏旅行。
　　（広島市公会堂、徳山、福岡）
　　永井主憲：《テ・デウム》他

第1回大学祭開催の想い出　18期　長谷川　晃

1969年末から1970年代初頭は正に日本は大学紛争の時代であり、日本全国で大学の民主化を求めて激しい学生運動が繰り広げられた。エリザベト音楽大学も学内は一応平穏であったが、学外の学生運動に参加する学生の数は日増しに増えていく状況にあった。

当時の学則は厳しく、音楽家を目指す学生にとって、例えば男女交際の制限など、大学による私生活にまで及ぶ指導は耐え難いものであり、大学に対する不満は時流にも乗り正に極限状態に有ったと言える。そうした中、当時の学長でおられた、今は亡きエルネスト・ゴーセンス氏は、それまでの大学による学生指導の方針を180度転換され、学生の自主責任による生活指導方針に改められ、さらに儀式以外における私服の着用も自由化された。

このことは、エリザベト音楽大学の歴史上、大きな改革であり、時代の流れの中で大変な決断をされた、エルネスト・ゴーセンス当時の学長の偉大さを改めて思う次第である。

その年1969年に「学生会」が組織され、秋には、大学紛争に揺れる他大学を尻目に、学生会主催による第1回大学祭が、「飛翔」をテーマに華々しく開催されたのである。

2月19日　スピリチュアルコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　バッハ:《マタイ受難曲》他
5月11日　第3回大学祭。テーマは「自由」。
5月30日　エリザベトコンサート。
　　−ピアノ、テノール−
10月12〜13日　日本音楽学会全国大会。
　　（同学会長野村良雄教授による特別講義他）
11月6〜10日　エリザベト音楽大学創立25周年記念演奏会。
　　（第25回定期演奏会）
　　広島（広島市公会堂）、福山、岩国、東京（日比谷公会堂）
　　ホセ・テホン:《祝典ミサ曲》他
　　イグナチオ教会
　　蒔田尚昊:《黙示録による幻想曲》他
12月 6日　ジャシャイエ講演会。
12月19日　クリスマスコンサート。
　　シャルパンティエ:《クリスマス・オラトリオ》他

■創立記念パーティー

■初代学長エルネスト・ゴーセンス神父を囲む会

昭和47年の思い出　19期　川嶋　隆志

大学の学生時代を思い出してみると、その時代は、他の大学では学園紛争の真最中であり、私たちの入試の時は、東京大学の入試が行われなかった時代である。他の大学卒業の同世代の者と学生時代について話し合う時、大学の先生と親しく話したという者は、たまにゼミの先生と話すぐらいだというのがほとんどであった。

私は、先生方に食事や飲み屋に連れて行ってもらったり、自炊をする時など多くの先生からカンパをしてもらった思い出がある。

また、何人かの先生から、「金がなくなったら○○の店に行って好きなだけ飲んで食べろ。店には私のほうから言っておくから。」と言われ、甘えさせて頂いた思い出もある。

私達は、先生方に、授業を含めていろんな面で、音楽に対する考えや、人としての生き方を学ばせてもらったことが、今の音楽への取組みや生き方の根底にあるような気がする 。私は諸先輩や友や先生方との人間的なふれあいを通しての素晴らしい学生生活に感謝している。

1973
［昭和48年］

■第26回定期演奏会

■創立25周年記念式典

■ゴーセンス理事長葬儀ミサ

2月9日　エリザベトコンサート。（広島郵便貯金会館ホール）
　　－ピアノリサイタル－
3月8日　**ゴーセンス理事長帰天。**
3月10日　同理事長の学園葬。（世界平和記念聖堂）
4月1日　上智大学鎌田武夫教授、第2代理事長に就任。
　　音楽学科パイプオルガン専攻は
　　宗教音楽学科の専修に組みかえる。
5月24～28日　**第4回大学祭。統一テーマは「一致」。**
6月16日　エリザベトコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　－オルガン、テノール－
11月12～17日　**第26回定期演奏会。**
　　（故エルネスト・ゴーセンス師追悼演奏会）
　　（広島市公会堂、北九州、佐世保、熊本、宮崎）
　　フォーレ：《レクイエム》他
11月22日　**創立25周年記念式典、並びに表彰式。**
　　（勤続10年以上の教職員）
　　創立25周年記念演奏会。
　　－ピアノ、ヴァイオリン－
12月18日　クリスマスコンサート。（世界平和記念聖堂）

■大学祭慰労パーティー

1973年の思い出　20期　白坂　泰徳

'73年とは、昭和48年で我々20期の卒業の前年になります。当時は全国的な大学紛争がようやく下火になりつつある時期で、エリザベトは大学紛争とは無縁でしたがこの数年前に学生会ができ、学生・教職員一丸となって初めての大学祭（確か"調和と飛躍"というテーマで）に取り組み数回目の大学祭を経験した頃です。

当初大学祭での酒類の販売は認められておらず、毎年当時のテホン学長に掛け合いビールとカクテル類の販売を認めてもらったのがこの'73年の大学祭でした。大量にビールやベースになるリキュール類を買い込みダンスパーティー等で振る舞った訳ですが、行事終了後も飲み続ける学生が続出し酔っぱらい天国という事態に陥り千鳥足でセシリアホームまで帰った学生もおり、テホン学長の怒りをかい次の年の大学祭では酒類の販売は中止となりました。まだ若く勢いだけで生きていたような頃の思い出です。

ゴーセンス神父の思い出　新井由子（瀬戸）　元学長秘書

ゴーセンス神父は若い時から不整脈があって、指揮をされた後などしばらく座り込んでおられました。その時測ってみると脈が飛んでいましたので、ご自分では昭和47年にヨーロッパへ一時帰国される迄、体調の不都合は心臓のせいだと思っておられたようです。検査にもいかれずアスピリンをよく飲んでおられました。しかし、ヨーロッパで神父の姉のご主人（医師）が、様子を見て即座に「検査をする迄もなく、糖尿病に間違いない」と忠告され、すぐリエージュの病院へ入院して食事療法を始められましたが、歩行もきついくらい体力を失い、痩せ細ってしまいました。

病状は思った以上に悪かったようですが、ご本人がどうしても日本へ帰ることを希望され、急きょ日本へ帰られました。ご自分でインシュリン注射を打ちながら療養しておられましたが、卒業生たちがカンパをしてくださり、治療を続けました。その残額で毎年のミサを幟町教会へお願いしています。

最上医院の院長先生は神父と親交が厚かったのですが、ご自分の病院に連れて帰られ、殆どタダに近い費用で亡くなるまでの2か月間お世話して下さいました。亡くなる少し前に「自分は本当に日本人を理解することが出来たのかな」と呟かれたのが耳に残っています。日本に憧れ、日本人を愛し、日本の特に広島に尽くして来られたゴーセン神父ならではの言葉だと思います。ご臨終も本当に穏やかで、いつの間にか眠ってしまわれたという感じでした。

生活は貧しくても見かけは質素でも、心が豊かであることが最も大切なのだ、との教えは、私にとって忘れられない教訓です。（談）

2月 9日　スピリチュアルコンサート。(世界平和記念聖堂)
　　グレゴリオ聖歌他
3月 8日　**ゴーセンス元学長胸像設置。**
7月22日　エリザベトコンサート。(広島市公会堂)
　　−テノール、ピアノ−
8月13日〜9月3日　マドリガルシンガーズ、スペイン演奏旅行。
10月28〜31日　第27回定期演奏会及び演奏旅行。(松山、倉敷、姫路)
　　ロッシーニ:《スタバト・マーテル》他
11月20日　エリザベト音大通信復刊(創刊号)。
11月22〜24日　**第5回大学祭。テーマは「信望愛」。**
11月25日　パリ・アルス・アンティクワ演奏会。(広島市公会堂)
12月17日　クリスマスコンサート。(世界平和記念聖堂)
　　バッハ:《クリスマス・オラトリオ》第1部他

■大学祭

■胸像除幕式

エリザベト音楽大学マドリガルシンガーズスペイン旅行

1974年8月12日〜9月3日　21期　星野　晴夫

「来年マドリガルはスペイン行キマス。」テホン学長の言葉に驚く暇もなく準備開始。先生の作られたプリントでスペイン語の簡単な会話練習も始まりました。1974年の夏、マドリッド、セゴビア、コルドバ、セビリア、グラナダ、バルセロナからフランス、イタリアへ3週間の旅に出発。マドリッドでは国営放送局で一日かけてのラジオ録音。グラナダではアルハンブラ宮殿を見学した夜、ホテルのホールで演奏会。(サングリアのあの味と色忘れられません。演奏会前に男子学生は白のブレザーを買いに走りました。)バルセロナではテホン先生のお姉さんの御宅で練習させて頂き、モンセラート修道院の聖堂や音楽週間の夜の野外ステージで歌いました。

旅行中、飛行機の故障やバスのフロントガラスが割れて足止めをくったり、伊勢海老がここでは安いと食べたはいいけれど1万円も払わされたり、とハプニングも色々ありましたが、同行の卒業生や先生方との忘れられない思い出が出来ました。

昭和49年の思い出　21期　村上　玲子(青原)

エリザベト音楽大学創立50周年を迎え、心からお祝い申し上げます。

今から27年前、私は、歴史の重みを感じさせる木造の講堂で、木のきしむ音を耳にしながら、人生の中で最も充実した音楽の勉強をする事ができました。特に、故テホン学長の作品研究の講義では、師の流暢でわかりやすく、時に理解しづらい日本語の解説のもと、膨大な作曲家の作品に触れ、そして、テスト勉強に多くの時間を費やした事が思い出されます。また、恩師後藤玲子先生からは、人間の声の無限の可能性を追求する事のすばらしさや喜びを学びとる事ができました。

セシリアホームと大学の間を毎日往復し、一日の大半を音楽の勉強に費やした学生生活の中で出会ったすばらしい先生方、友、また、音楽の体験は、今でも私自身の生き方の中で、かけがえのない財産であり、大きな支えとなっています。

今後の母校のご発展をお祈りし、21世紀を担っていく優秀な人材が育っていく事を期待しております。

1975
［昭和50年］

3月 1日　スピリチュアルコンサート。（世界平和記念聖堂）
3月10日　新幹線が広島まで開通。
4月23日　ヤコブ・フーリング、ピアノリサイタル。
5月15～19日　第6回大学祭。
6月30日　エリザベトコンサート。（広島市公会堂）
　－ピアノ－
7月18日　村上清人教授、旧職員マルタン（シスターマリア）
　先生はフランス政府より叙勲。
9月29日　エリザベトコンサート。（世界平和記念聖堂）
　－バリトン、オルガン－
10月 9日　マリオン・リヒター、ピアノリサイタル。
10月15日　広島東洋カープ初優勝。
10月27～30日　第28回定期演奏会及び演奏旅行。（松江、舞鶴、京都）
　モーツァルト：《戴冠ミサ曲》他
12月15日　クリスマスコンサート。（世界平和記念聖堂）
　バッハ：《クリスマス・オラトリオ》第2部他

この年、中・四国新人演奏会発足。

■卒業式

■エリザベト少年合唱団（1957年頃）

昭和50年の思い出　22期　山城　育子（松本）

昭和50年第2号エリザベト通信によると、大学のカリキュラム改善が進み、学科増設も予定された時期とある。又、学生の完成の為にあらゆる分野を大事にしなければならないという大学の方針は何ら変らないとも述べられている。今読み返すと、大変な過渡期に大学生最後の年を迎えていたのだと感慨深いが私自身の記憶には余りある時間をピアノに向かって過ごした幸せな学生時代としか残っていない。大学の方針には添っていたらしい。専門科目より一般教育科目の授業が楽しみな変な音大生だった。文学、憲法、フランス語、文化史。授業のおもしろさそのまま先生の魅力となって思い起こされる。今、教員として母校と共に有る私にとって、この《思い出》を語るべき一文により思い起こされた過去が未来への思わぬ戒めや指針となった様に思う。新たに来たる大きな過渡期に何をなすべきか、教師として学生に何を伝えるか。50周年の今、未来をしっかり見据えたい。

1976
［昭和51年］

4月 1日　声楽学科、器楽学科増設。（計4学科となる）
4月24日　**第1回中・四国新人演奏会**。（広島市公会堂）
6月 4日　エリザベトコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　－メゾ・ソプラノ、オルガン－
10月 1日　エリザベトコンサート。（広島市公会堂）
　　－ピアノ、ヴァイオリン－
10月 6日　レオノラ・ミラ、ピアノリサイタル。
10月25～28日　**第29回定期演奏会及び演奏旅行**。
　　（山口、呉、三原）
　　バッハ：《マニフィカト》他
11月19～22日　第7回大学祭。テーマは「三位一体」。
12月13日　クリスマスコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　バッハ：《クリスマス・オラトリオ》第3部他

■第1回中・四国新人演奏会出演者

■山口公演

昭和51年の思い出　23期　門野　光伸

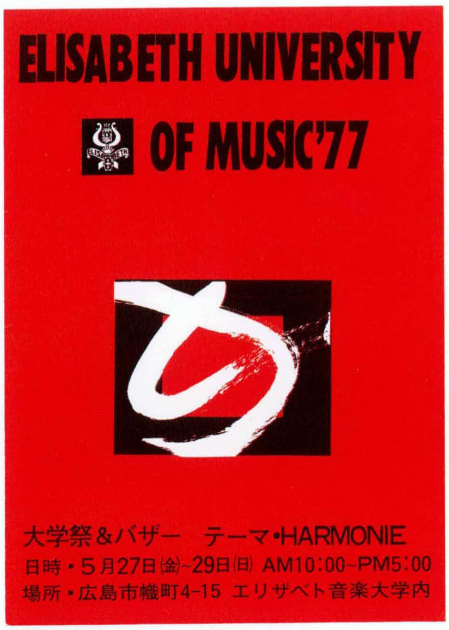
ちょうどこの年は私たちが、学生会の中心となって動いた年でした。何と言っても、春の大学祭がメインの行事でした。自分たちが1年生のころから先輩たちに教えてもらったことの引き継ぎでしたが、さて、自分たちでやっていくということになると、何もかもわからないことだらけでした。

今にして思えば、先生方にも非常にご心配をかけていたようで、大学祭を前に話し合いの場を持って下さいました。音楽大学の学生としてやることはもっとあるのでは?という問いかけをいただいたように思いますが、その時はやらなければ…という思いだけで結局先生方も仕方がないと思って下さったようでした。

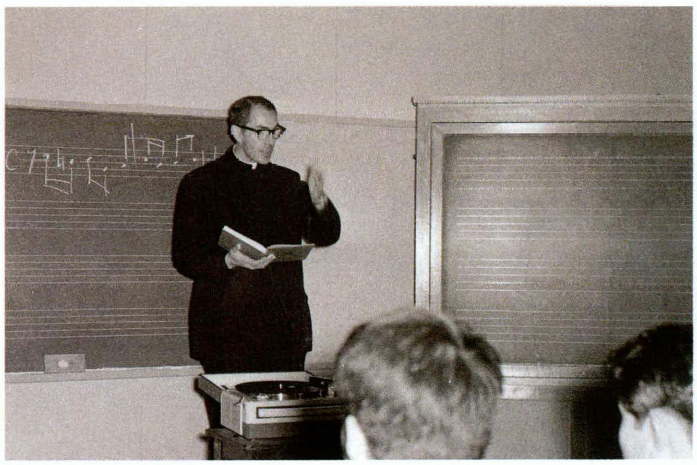
しかし、私たちの中にはこの頑張りがいまでも共通の思い出としてお互いを支え合ってくれているように思います。

1977
［昭和52年］

5月27～29日　**第8回大学祭。テーマは「ハーモニー」。**
6月10日　エリザベトコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　－テノール、オルガン－
9月28日　ウークラン、ピアノ公開講座。
9月30日　エリザベトコンサート。（広島市公会堂）
　　－フルート、ピアノ－
10月24～27日　第30回定期演奏会及び演奏旅行。（高知、徳島、高松）
　　プーランク：《グローリア》他
11月 9日　**英国文化使節A.ホプキンス（ピアノ）来校。**
　　（演奏解釈と公開レッスン）
12月12日　クリスマスコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　バッハ：《クリスマス・オラトリオ》第4部他



■大学祭パンフレット


■テホン学長の授業風景

■英国文化使節アントニー・ホプキンス

昭和52年の思い出　24期　濵本　恵康

思い出してみますと、20年前のピアノ科（当時はコースではなく、科と呼んだ）は、1学年に30人ほど。しかも、後にも先にもピアノ科に男子が3人もいたのは、私の学年が初めてと記憶している。今では、それぞれ教師として、またピアニストとしても頑張っている。

現在の立派なセシリアホールと違って、その頃のホール（名前はサビエルホール）は古い木造建築で、冬の試験の時には、すき間風が厳しく、舞台の袖で、順番を待つ時は、それこそ死ぬ思いであった。だから、自分達の出番が来る間際に、お互い呼びに行きあったものである。勿論、スタンウェイのフルコンだったのだけど、象牙の鍵盤がやけに黄ばんでいて、タッチも小さくデコボコがあって不揃い気味。年代を感じさせていた。ただし、その音色には渋みがあって、また奥ゆかしくきらびやかでもあった。

防音や遮光も不完全なので、演奏中も外の明かりや、ざわめきなどが気になるものだから、短時間集中型の私には不向きだったかも知れません（ホールのせいにしてはいけませんが）。

1978
［昭和53年］

4月 6日　旧師保田史郎教授帰天。
6月 9日　エリザベトコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　－オルガン、ソプラノ、トランペット－
10月 2日　エリザベトコンサート。（広島郵便貯金会館）
　　－オーボエ、ピアノ－
10月 3日　園田高弘ピアノ公開講座。
10月10日　フィーネ・クラーカンプ、チェンバロ公開講座。
11月 1日　イタリア文化使節によるジョイントリサイタル。
　　（広島見真講堂）
　　マルコ・レンツィ（ヴァイオリン）、
　　マリオ・カポラローニ（チェンバロ）
11月6～8日　第31回定期演奏会及び演奏旅行。（三次、小倉）
　　グノー：《聖セシリアのためのミサ曲》他
11月 9日　テホン学長、スペイン政府より文化功労章受章。
12月11日　クリスマスコンサート。（世界平和記念聖堂）
　　バッハ：《クリスマス・オラトリオ》第5部他

■大学祭

■幟町公園で海外使節を見送る学生（なつかしいマツダのパタンコ）

昭和53年の思い出　25期　牧　登視生

エリザベトの歴史50年。この歴史の真ん中にいる私たち25期が大学4年の昭和53年（1978年度）といいますと、今からちょうど20年前ということになります。その年は、日中、米中と相次いで国交正常化がなされ、米ドルはいよいよ 200円を割りました。共通一次試験も始まりました。

12月に大平内閣が発足しましたが、私たちの卒業式でのご挨拶の中で、当時の理事長鎌田先生が「日本で初めてのクリスチャンの首相です。彼は抱負の中に史上初めて文化の重要性を掲げています。喜ばしいことです。」とおっしゃっていたことを覚えています。

この年だけ卒業式は隣の大聖堂でおこなわれました。というのは、前の木造の講堂を壊し新しいホールを建設中だったのです。エリザベトが現在の偉観に生まれ変わるための最初の大工事だったように思います。

名実ともにますます母校エリザベトが発展されますように心からお祈りする次第です。